# 育G新聞

Vol.14

イクジイが日本を元気にする。

毎月1回連載

育G新聞編集部　編集協力：
NPO法人 ファザーリング・ジャパン
NPO法人　孫育て・ニッポン


## 育G インフォメーション

### イクジイ・スクール 第2期

【日　時】4/25(木)・5/9(木)・5/23(木)・6/6(木)
6/20(木) 全5回 隔週木曜日18:30~20:30

【受講料】全5回：10,500円（税込）※単科受講も可

【場　所】東京都文京区・日火江戸川橋ビル会議室

【対　象】子育て、孫育て、社会貢献に関心のある男性（孫がいなくても受講可）

【内　容】① 4/25(木)
イマドキの子育て孫育て

② 5/9 (木)
地域の孫育て　～イクジイ事例紹介

③ 5/23(木)
社会の求めるイクジイとは
～笑っているイクジイが日本を変える

④ 6/6 (木)
中高年男性のこれからのライフキャリア、創続のすすめ

⑤ 6/20(木)
子どもとの関わり方と社会的保育の現状
※保育園にて体験保育自習あり

【主　催】特定非営利活動法人ファザーリング・ジャパン

【電　話】03-6902-1694

【詳　細・お申し込み】
http://www.fathering.jp/ikujii/school

No.14

# 育G発見！ special

## ～ イクジイ予備軍時代の準備が未来につながる ～

「笑っている父親を増やそう」をミッションとして活動しているNPO法人ファザーリング・ジャパンの50代以上のメンバーが集まり、「孫・ジイ」をテーマに“イクジイ・カフェ”を開催。今回はそのレポートです。まだ誰にも孫はいないけれど、子育てに関わってきた彼らの語りの中から「未来のイクジイの姿と問題点」が見えてきました。

富永誠治（61歳）
労働組合職員

田中尚人（50歳）
絵本会社社長

福井正樹（56歳）
NPO法人 KIRALI 代表理事

岩野和仁（53歳）
日本キャリア開発協会　会員

安藤哲也（50歳）
NPO法人タイガーマスク基金
代表理事

村上 誠　（41歳）
専業主夫
NPO法人ファザーリング・ジャパン
イクジイプロジェクトリーダー

### ～シニアを地域に融合させるには？～

村上：一世代上の今の育G世代は、仕事一辺倒だった人々。地域につながりがなく、孤立している人が多いのが現状です。孫がいるかいないかもそうですが、孫がいるにしても年齢層が幅広くなっています。十代で子どもを産んでいる人は、40歳過ぎでも孫がいたりするし、70～80歳でも孫がいないという人もいる。下の子がまだ自立していなくても、孫育てがスタートする場合もあり、様々な状況になっています。定年退職後とか、セカンドライフとしてスタートするのではなく、今の働き方や生き方とクロスしていくべきでしょう。いろいろなアイデアやアドバイスを出してください。

安藤：今は70歳でも老人に見えない人もいるからね。定年の底上げもありだと思います。

富永：定年後は海外旅行やそば打ち…ではなく、地域で活動してほしいけれど、なかなか社会貢献とか、地域と関わること等が苦手な人が多いのが現実。地域には宝物がいっぱい転がっているわけで、積極的に関わるきっかけをどうやって作り出すかですね。

福井：公民館が重要な役割を担っていますね。しかし、ニーズが合っていない。演歌と民謡など、後期高齢の人向けのメニューしかないんですよ。枠組みを作る行政が、ノープランという印象があります。

安藤：シニアが、自分たちで作り上げていくというパワーはないんですか？

田中：あまり期待できないし、期待してないな。むしろ、景気的にも、今まで貯めてきたお金を、社会に放出してくれるといいんだけど。

岩野：シニア世代は、幸せ感が低いのが現状。引きこもりのシニアも多いですね。65歳以上の4人に1人が働いていますが、他にやることが見いだせないから、働いているという人も少なくありません。

### ～ポジションを用意することも必要～

福井：人口5000人くらいの地域の自治会長をしたことがあるのですが、枠組みやステージを設けると、やりたい人も多いのですが、自発的に活動してもらうのは難しいですね。

田中：父親たちのネットワークと似ているところだね。ポジションを用意してあげないと、

育G（イクジイ）とは・・・・育Gの「G」は Grand Father の G！　孫育て、あるいは地域の子どもたちの育成に力を注ぐことで、豊かな社会経験を

出て行かれない。

福井：子育て世代の父親の活動“親父の会”などと、地域が融合していないんですよね。地域は70代以上が仕切っているのが現状。40代で自治会長になったとき、70代以上の人たちに、プレッシャーをかけられました(笑)。10年後、上の世代がいなくなると、地域は空洞化。下の世代を育てないと。

安藤：シニア世代は、地域に出ていくというのがこれからの課題でしょうね。社会化することで、イクジイとしても、主体的に地域に関われるようになるわけだし。

岩野：シニアたちは、今の世代の役に立ちたいと思っている人も少なくないのでは？孫ができるタイミングは、社会に目を向けるいい転機だと思います。

福井：焦点を絞ると地域に参画しやすくなるんじゃないのかな。近所の子どもと遊んでもらうとか、具体的に場を作ってあげると、関わりやすくなりますよ。出て行くところが増えれば増えるほど、シニア世代は元気になっています。そもそもシニア世代が企業で積み上げたキャリアと、地域のキャリアには、連続性がないんですよ。地域のキャリアは、今まで経験したことがないから、セカンドキャリアということにはならないでしょう。

岩野：セカンドキャリアを作る時には、ビジネスキャリアだけでは不十分。子どもの頃からさかのぼり生き直す。自分のやって来たことすべてが生きてくるんです。違う分野でも、ビジネスキャリアは必ず役に立ちます。

安藤：理想はそこ。

岩野：キャリアカウンセラーになってから、理想としている生き方があります。0歳－30歳は「土台作り」、30歳－60歳は「自分のエゴ（家族を作る、仕事をするなど）を実現する」、60歳－90歳は「他者のために役立つ」という人生です。

## ～イクジイ予備軍時代がカギ～

村上：子どもにはいろいろな役割の大人が

必要だと思います。昔は、役割が分散されていたけれど、今は親にほとんどの役割がのしかかってしまう。子どもたちは、怒られた時の逃げ場も無くなってしまいましたね。

富永：今は自己肯定感を持てない子どもが多いですからね。ジイやバアが溺愛して、大切な存在であると子どもに伝えることが大事。

岩野：「年寄りといると、ほっとする」という親や子どもも少なくない。空間に一緒にいること、老いる姿を見せることも大事ですね。

安藤：子どもたちに、ノウハウでなく、生き方などを伝えるツールが必要なのでは？

福井：最近は社会的規範を教える大人がほとんどいない。父性の役割が喪失していますね。タバコを吸っている未成年をみつけたら叱る。叱ってもらうことは、認めてもらうことだと思うのですが。

安藤：父性の役割を発揮できる場所というのは、いきなりは難しいのでは。

福井：地域で活動しているジイたちのロックバンドは、若者たちから尊敬されていますよ。時代のニーズに合わせていくことが必要ですよね。パソコンやケータイを使いこなしたり、すごいゲームが上手なジイの言うことなら、子どもたちが言うことを聞くとかね。

岩野：遊びでも、勉強でもいいですよね。

安藤：地域にジイのデータバンクを作り、活用したらいいのでは？ 定年後の準備をせずに定年を迎えてしまうと、いざ地域に出ようと思っても技がない。「予備軍時代が大切。準備をしよう！」というアラームを50代に向けて鳴らす必要がありそうだね。そして、子どもに尊敬されるジイを明確に提示する。

福井：例えばあまりスキルのない人なら、スキルがあまりいらない、読み聞かせなどもいいのでは。

岩野：一緒に楽しめるものなら、何でもいいですよね。

田中：子どもになめられない技があるといいよね。粋なジイさんバアさんは若いときから育てなくちゃいけない。

福井：地域のためにでなく、自分のために、生きがいのために、やりたいですよね。自分の孫でなく、地域の孫と関わるナナメの関係がいいのではないでしょうか。自分は、地域の孫を見て、自分の孫はその地域のイクジイ・イクバアが見るという形。

田中：人生の先輩として、孫たちに関われると良いよね。

福井：シニアになってから、ファミリーサポートに登録したりするのもいいですよね。自分の孫は、地域のファミリーサポートに見てもらう方がいいんじゃないのかな。

村上：平均寿命が延びているから、団塊世代は60～70代のモデルケースを見ていないんですよ。シニアのいろいろな生き方を、モデル化して見えるようにすることも必要ですね。